開催地名	東京都 八王子市
開催日時	令和7年2月22日(土)10:00～11:30
開催場所	八王子市役所本庁舎8階　801･802会議室
語り部	松井　憲(広島県広島市安佐南区)
参加者	八王子市民　150名(八王子市役所職員　5名)
開催経緯	本市では、地域住民の防災・減災の意識向上を図るため、自主防災組織の結成や、地域防災リーダーの育成事業、防災講座等を継続的に行っており、地域住民の防災に対する意識向上や避難所運営についても意識向上が感じられるが、被災地での活動等実体験の話を直接聞く機会が少ないことから、自分自身に置き換えることが課題となっているため、本講習を実施した。
内容	(1) はじめに 本プロジェクトでは、平成26年8月20日に発生した広島豪雨土砂災害を経験した語り部が、自身の被災体験をもとに、防災意識の重要性について講演を行った。語り部は、当時自治会の副会長を務めており、自らも被災しながら地域の捜索活動や復旧活動に携わった。現在は、令和5年9月に開館した広島市豪雨災害伝承館の副館長として、防災教育や展示説明などを通じて、災害の記憶を次世代へ伝える活動を行っている。 (2) あの日のこと 平成26年8月19日夜から20日明け方にかけて、広島市では1時間あたり87ミリ、24時間で247ミリという観測史上最大の集中豪雨が発生した。安佐南区及び安佐北区では大規模な土石流が発生し、建物被害は全壊179棟、半壊217棟を含め計4749棟に及んだ。また、消防や警察、自衛隊による救助活動が昼夜を問わず行われたものの、災害関連死3名を含む77名が犠牲となり、69名の負傷者が出た。 語り部は、当時の状況を詳細に振り返った。深夜0時頃、激しい雨音で目が覚め、床下収納にあった重い物が浮き上がるほどの浸水が確認された。さらに、車の警笛やハザードランプが点滅し、遠くからは鈍い音が響いていた。外に出ると、母屋と離れの通路がまるで川のようになっており、家が流されるのではないかという恐怖に襲われた。状況が分からない暗闇の中で異臭を感じ、直感的に危険を察知したものの、まさか自宅が床下浸水しているとは考えが及ばなかったという。 また、実家の屋根には近隣住民が避難しており、玄関には70センチの泥と60センチの水が溜まっていた。この状況下で避難所へ移動するのは危険と判断し、レスキュー隊の誘導のもと2階のベランダから救助された。その後も、土砂に埋もれる感覚に襲われることがあり、精神的な負担が続いた。震災後の生活再建の過程は特に困難を極め、被災者の心身への影響が長く続いたことを痛感したという。 語り部は、自らの体験をさらに詳しく振り返り、災害発生時の身体的・心理的な影響についても言及した。雨が降り始めたのは0時半頃であり、トタン屋根に叩きつける雨音が響いていた。普段は鳥の鳴き声や新聞配達のバイクの音が聞こえる時間帯になっても、外は異様な静寂に包まれていた。そして、崩れた土砂の中から木々が引きちぎられ、独特の爽やかな香りが漂っていた。これまで経験したことのない状況に、恐怖と不安が募っていった。 ヘリコプターの救助がなかなか到着せず、不安が募る中、自衛隊の姿を見たときには「ようやく助かる」という安堵の気持ちが湧き上がった。玄関先には膝上まで土砂が詰まり、体当たりをしながらようやく扉を開けたが、外に出ると足が泥に沈み、通常であれば15秒ほどで移動できる距離に15分もかかった。何とか避難したのは、発災から約10時間後のことだった。語り部は、「災害は一瞬で生活を奪うものであり、被災後の生活は心身共に過酷なものである」と強調した。 (3) その後のこと 災害発生後、語り部の自宅周辺には毎日土砂が堆積し、最終的には1メートルもの厚さに達した。家に戻ることができたのは発災から10日後であり、その時点でも行方不明者の捜索が続いていた。直径4メートルほどの巨大な岩の下に人が埋まっている可能性があったため、重機を使って岩を割り、網のついたブルドーザーで土砂をふるいにかける作業が24時間態勢で行われていた。作業の合間に何かが見つかった際には作業音が止まり、その瞬間に誰かが発見さ

	れたのだと理解せざるを得なかったという。このような状況が続いたため、現在でも工事の音を聞くと、当時の記憶がフラッシュバックすることがあると語った。 また、被災者の精神的影響は長く続く。別の被災者の中には、「災害後の腐葉土のような匂いが洗濯物に付くのではないか」と不安を感じ、屋外で洗濯物を干せなくなった人もいる。さらに、インフラ整備の進展に伴い、住民の立ち退きが進み、地域によっては自治体の3分の1の世帯が流出した。その結果、長年築かれてきた地域のコミュニケーションが希薄になり、高齢者が孤立するケースが増え、認知機能の低下も指摘されるようになった。被災地のハード面の復興は進んでも、被災者の心のケアは今なお大きな課題として残っている。 （4）まとめ 防災の意識を高めるには、地域の防災リーダーとの連携が欠かせない。語り部は、毎月の勉強会を実施し、年間4～5回にわたり小学校高学年を対象とした防災授業を行っている。授業では、架空の地図を用いた避難計画の策定や、段ボールベッドの組み立て実技を取り入れ、児童の防災意識向上に努めている。また、公民館では、親子で通学路の防災マップを作成し、安全なルートを考える取り組みを行っている。 防災意識の向上には、日常生活の中でのシミュレーションが重要である。地域イベントの一環として防災訓練を実施することで参加率を向上させる工夫も求められる。特に消防車の展示は子どもたちが集まりやすく、その保護者も関心を持つきっかけとなる。また、行政がキッチンカーを誘致することで地域住民との関係構築にもつながる。 災害後の心のケアの重要性も指摘された。被災者の中には長年トラウマに苦しむ人も多く、地域でのサロンや茶話会を開催し、コミュニケーションを取る場を設けることが求められる。家族を守るためには、平時からの準備が欠かせない。災害が発生した際に、どこへ避難するのか、どのような手段を用いるのかを事前に決めておくことで、避難の意識が変わる。
開催地より	広島市豪雨災害を経験された語り部から、発災後の捜索活動や地域住民の心のケアの対応についての具体的な話が聞けたことを活かしていきたいと思います。本日の講演を受けて本市では、市民への自助・共助の推進と防災意識の向上に努めていきたい。